

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(3 8)

中村周平

第1回のラグビー事故勉強会開催に向けてまず取り組んだのは、実際にお話をさせていただき事故被災者やそのご家族、ご遺族の方々（以下、事故当事者）を探していくことでした。残念ながら、スポーツによる死亡事故や重篤事故は、リスクの高いコンタクトスポーツを中心に年間で一定の件数が発生しており、そのことは研究活動の中で把握していました。

また、同志社での研究活動やスポーツ事故に関わるシンポジウムなどに足を運んだことを通して、様々な事故当事者の方々と繋がることができ、連絡先を交換していただくことができました。そういった方々の多くが、ご家族を亡くされたり、学校や

チームと対立されたり、非常につらい過去や出来事を経験されたにも関わらず、再発防止を求めて積極的に情報発信をされていました。

これは本当にありがたいことなのですが、こちらから勉強会の連絡をさせて頂いた際は、快く引き受けて下さいました。現在まで勉強会が継続して開催できている背景には、事故当事者の方々の厚意的な御協力があったからこそだと感じています。今後、開催を重ねていく上で「この人にはお願いしたい！」というリストが私の頭の中で組み上がっていきました。

次に、どのような形でお話をしてくかということを考えていきました。事故当事者の方からお話を聞いたという時点で、開催の目的は概ね果たせていると感じていました。

ただ、そのお話を受けて、参加者それぞれの立場から自らの経験に基づいた意見や質問をしてもらうことで、お互いの考えや思いを共有することができ、より意味のある勉強会になるのではないかと。会の名称に「勉強会」を付けた当初の思いに則って、事故当事者からの報告だけでなく、その後に質疑応答を交えた議論を行う形にすることで方向性を決めました。

勉強会を重ねていく上で、必ず問題の1つとして挙がってくるのが開催場所の問題でした。他府県からの利便性も考慮し、また一定の広さを確保する為には、利用料という金銭的な負担が伴います。また、重篤事故によって車いすを利用する事故当事者の方や主催者の一人である私自身の状態から、開催場所がバリアフリーであることは最優先事項でもありました。

このいくつかの条件を満たした上で、継続的な開催を考えれば、この利用料という負担は決して軽視できるものではありませんでした。その点については、研究活動の一環ということもあり、所属している同志社大学で部屋をお借りすることができました。

同志社大学は今年で創設147年を誇る大学であり、建物の中には歴史的価値のある建造物として登録されているものもあります。それ故に、バリアフリーが行き届いていない建物も存在していました。

その一方で、早くから障害のある学生への支援に取り組むその大学の理念は、新しい建物のバリアフリー化や当事者の意見を交えたアクセシビリティ環境といった障害のある方々への配慮が行き届いた、非常に素晴らしいものだと思います。

勉強会の開催場所として借りた教室も、エレベーターや車いす用トイレなどが完備されており、安心して事故当事者の方をお招きできる環境となっていました。